

発刊にあたって

世界有数の古代湖である琵琶湖は、日本最大の淡水湖として、60種を超える固有種をはじめとする多くの生き物でにぎわう豊かな湖であるとともに、近畿圏の人々の暮らしを支える貴重な水資源です。古来、この琵琶湖の豊かな恵みを楽しむつつ自然と共生し、独自の生活様式や文化、景観をつくりあげてきた私たちは、この多様な価値を未来に受け継いでいく必要があります。

琵琶湖の水質は長期的に見て改善傾向にありますが、在来魚介類の生息環境の問題や森林資源の活用等、本県の環境は様々な課題に直面しており、特に2019(令和元)年度、2020(令和2)年度は琵琶湖での全層循環が確認されませんでした。これには様々な要因が考えられますが、やはり気候変動の影響は無視できないと考えています。集中豪雨など、急速に進行する気候変動の脅威は、本県にも大きな影響を及ぼしており、これらへの対処は喫緊の課題といえます。

こうした課題に対応していくためには、これまでの「いかに環境への負荷を抑制するか」の視点に加えて、「いかに適切に環境に関わるか」という、より広い視点が重要です。様々な環境問題を「自分ごと」として捉え、自ら行動していく必要があり、2021(令和3)年7月にスタートした琵琶湖版のSDGsである「マザーレイクゴールズ(MLGs)」は、そのための指針です。

2024(令和6)年12月には、1984(昭和59)年に滋賀県で行われた第1回世界湖沼会議の開催日である8月27日が、国連で「世界湖沼の日」に制定されました。「世界湖沼の日」は各国や国際機関が湖や沼の重要性を認識し、協働して持続可能な形で維持・保全・再生する日です。湖沼が抱えている課題、有している可能性をいま一度見つめなおし、本県の美しい自然を守りながら、地域資源を活かすことで私たちの生活を活性化させ、豊かで美しい琵琶湖を次世代へと引き継いでいけるよう、皆様とともに取り組んでいきたいと思います。

一人ひとりの価値観や知識、経験が多様多様な中で、みんなで琵琶湖のために行動を起こそう、暮らしを変えていこうとするのは並大抵のことではありません。このハンドブックは、琵琶湖の誕生から最新の知見・課題まで、幅広くわかりやすく紹介しています。本書をきっかけとして、より多くの人々が、科学的知識を共有し、共通の問題意識を持つことで、琵琶湖を中心とした持続可能な社会づくりの取組の輪が大きく広がっていくことを期待します。

滋賀県知事

三 明 大 造